

良い家が、

良い社会を育む

——スウェーデン住宅の可能性とは——

外交官であると同時に日本の研究者でもあり、俳人でもあるラーシュ・ヴァリエ駐日大使と、弊社社長の岡田正人による対談が、スウェーデン大使館で実現しました。ヴァリエ大使は1972年の初来日以来、スウェーデンと日本を行き来し、日本での暮らしは実に17年間。日本を「第二の故郷」と呼ぶ大使に、日本の住宅に対する印象や、これからの住宅への、あるべき姿を伺いました。

岡田 大使は1972年に、京都大学での研究のために留学された折に、初めて日本での生活を経験されたと同っています。その頃の日本の暮らしにどのような印象を持たれましたか。

大使 最初の1年間、南禅寺の裏にある小さな神社に下宿していました。簡素な造りで暖房もなく、冬はものすごく寒く、夏はものすごく暑い…冬は室内でも零度以下になっていたと思います。スウェーデンでは、1930年代には既に窓は2重ありました。夏には外側の窓を外し、冬にはつける…ですから非常に驚きました。

岡田 そうですね、当時の日本の住宅環境は、そのようなものだったでしょう。特に京都は盆地ですから夏の暑さと冬の寒さは格別だったかと思います。私はその頃は北海道にいましたが、家の中でも氷点下30度などという日もありました。だから凍ると破裂してしまうビールなどは冷蔵庫に入れる。凍らないように冷蔵庫へ…保温庫ですね（笑）

大使 本当に、布団の中から手を伸ばしてストーブをつけて、暖かくならなければ起きられないほどでした。けれど、私はスウェーデン人ですから、日本の「木

スウェーデンハウス株式会社
代表取締役社長

岡田 正人

駐日スウェーデン大使
ラーシュ・ヴァリエ閣下

の家」が好きでした。自然と一体化する家での暮らしは、俳句を学ぶ上でも役に立ちました。

しかしその後、70年代の終わりから80年代にかけて、日本のあちらこちらで、木ではなく、金属を使用した家がどんどん、ものすごい速さで造られた…そんな時代がありましたね。あまり美しいとは思えなかったのを覚えています。今はまた、時間をかけて良い家を建てているように感じます。

岡田 スウェーデンハウスは今年で創業30年を迎えましたが、この30年で、日本人の住まいに対する意識も随分変わってきたと思います。創業当初、木製サッシ3層ガラス窓など日本の風土にはオーバースペックではないかと、競合他社から言われたりもしましたが、ここに来て、世界的にも環境問題、省エネが叫ばれる中、我々が譲らなかつた高気密・高断熱の住宅の良さがクローズアップされてきています。弊社の取り組みは、少なくとも日本人の住環境への意識を高めるために、貢献したのではないかと、自負しています。



大使 スウェーデンハウスが創業した30年前、私も日本にいました。スウェーデンの住宅と聞き、「大丈夫かな、造り方は分かるのかな」と思ったものです。なにしろ京都の下宿先とはギャップが大きすぎるので(笑)。けれど、後になって、北海道のスウェーデンヒルズを訪ねた時には驚きました。スウェーデンそのもの。厚い壁、木の香り、3重の窓、安心感：懐かしいというよりも、スウェーデンの

家そのものだったので、何の違和感もありませんでした。日本で出合うスウェーデン住宅：不思議な感じはしましたが、丈夫なスウェーデン住宅は、日本のように自然災害の多い国にこそ、必要な建物だと思います。

岡田 そうですね、構造体がとても丈夫なスウェーデンハウスは、災害時にも強さを発揮します。そして手を入れなが

ら大事に暮らすことで、愛着を持って、長く住める家です。スウェーデンには築100年を超える家など、たくさんありますでしょう。

大使 スtockホルムの郊外にある私の家は1890年代に建てられた木の家ですが、自分たちでメンテナンスをしながら、快適に暮らしています。スウェーデンでは、「自分で家を建てられなければ、男ではない」と言われていて、私も離れのような小屋を建てたことがあります。楽しいですよ。木の家だからできることです。コンクリートの家ではそうはいかないでしょう。

岡田 「楽しむ」ということは、大切ですね。一人ひとりが家での時間をもっと楽しめるようになれば、日本ももっと豊かになると思うのですが。

大使 日本で暮らしていて思うのは、女性ももっと自由に働けるようになれ

災害の多い日本にこそ、スウェーデン住宅を。

ば、この国はもともと、経済的にも精神的にも豊かになれるのではないかと考えています。

スウェーデンでは、働くことのできる女性のうち72%の人が働いています。男性の場合が78%ですから、男女ほぼ同じ、平等です。そのような社会になる際にこんな言葉がありました。「革命を起こすのは、政治でも自動車でもなく、洗濯機である」――まず、家の中で革命が起きて、女性は自由になりました。洗濯機の次は食洗機、気密性の良い家になれば入ってくる埃も減り、掃除の時間も短縮できます。小さなことが積み重なって、人の動きが変わり、社会が変わる、国家が変わる。そう考えると、その源はやはり「家」なのです。さらに言えば、しっかり休める家があれば、翌日良く働けます。もちろん、家のあり方が全ての条件ではありませんが、豊かな国づくりのために、家が担う責任は大きいです。

岡田 なるほど、とても良く分かります。

省エネルギーの家、心から寛げる家、健康な家：手前味噌ですが、スウェーデンハウスの方向性は、ハード面でもソフト面でも、まさにその考えに合致するものだと思います。

大使 「スウェーデン」と名のつく家ですからね。家は人生の半分を過ごす場所です。仕事が終わって帰りたい家があれば、家族ともうまくいきます。仕事

もはかどり、満足が得られ、健康でいられます。だからスウェーデンでは家を大切にするので。

岡田 良い家が、良い社会を育む――責任重大ですが、やりがいのある仕事です。この30年の実績と経験、皆さまへの感謝を礎として、これからも精進していきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

